



Data

監督・製作：ラージクマール・ヒラニ

出演：アーミル・カーン/アヌシュカ・シャルマ/スシャント・シン/ラージブート/サンジヤイ・ダット/ボーマン・イラニ/サウラブ・シュクラ/パリークシト・サーハニー/ランビール・カプール

👁️👁️ みどころ

歌わない、踊らない。近時はそんなインド映画の名作も登場しているが、インド映画はやはり歌って踊って楽しいのが一番！まさに、本作はそれだ。

宇宙人のPKが地球上に降臨。しかし、リモコンを失ったため「神さまが行方不明」のチラシを配り歩き、インチキ新興宗教の導師と対決。テレビでの公開論争に挑むことに・・・。

宗教のインチキ性をメインテーマとし、宗教の異なるインド人女性とパキスタン人男性との恋が破れたカラクリにミステリー調で肉薄！その中で明らかになる真実とは？そして論争の勝者とは？若干つめ込み過剰気味ながら、感動的な収束ぶりはお見事！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■歌って踊る本来のハリウッド映画の出来は？■□■

インド映画（ハリウッド映画）の最大の特徴は「歌って踊る」だが、『マダム・イン・ニューヨーク』（12年）（『シネマルーム33』38頁参照）、『めぐり逢わせのお弁当』（『シネマルーム33』45頁参照）という近時のインド映画は、「歌わない踊らない」が特徴の傑作だった。さらに『チェイス!』（13年）はバイクによるアクロバット・チェイスを中心としたアクションとシリアスな双子の兄弟の物語がめちゃ面白かった（『シネマルーム35』120頁参照）し、『女神は二度微笑む』（12年）もハリウッド映画に珍しい失踪ミステリーの傑作だった（『シネマルーム35』127頁参照）。

それに対して『チェイス!』の主演としても出演した、インドで一番有名な俳優（？）アーミル・カーンが主演した本作は、歌と踊りをふんだんに使いながら観客の笑いと涙を

誘っていく本来のボリウッド映画。もっともそのメインテーマは宗教で、本作の悪役として登場する新興宗教の導師（サウラブ・シュクラ）はいかにもインチキっぽいから、大きな社会問題提起作でもあるが、他方で宇宙船に乗って地球にやってきた主人公は素っ裸の宇宙人PK（アーミル・カーン）という設定だから、そのアンバランスぶりが面白い。姿かたちも動き方もかなり異様な宇宙人PKが素っ裸で登場し、胸につけたリモコンを奪われるという冒頭のバカげたシーンを見ていると、一瞬「こりやダメか？」と思ったが、その後ぐいぐいと面白いストーリー展開に引き込まれていくことに・・・。

■□■インド人女性とパキスタン人男性の恋の行方は？■□■

本作は冒頭で宇宙人PKの地球上への「降臨」シーンをバカバカしく見せつけた後、スクリーン上はペルーに留学中の本作のもう一方の主人公であるインド人の女性ジャグー（アヌシュカ・シャルマ）と、パキスタン人の男性サルファラーズ・ユースフ（スシャント・シン・ラージプート）とが1枚のチケットをダフ屋から購入し、半分ずつ活用しようとしているにもかかわらず、そこに登場したインチキなおじさんのおかげでその計画がボロボロにされるシーンが登場する。それだけ見れば悲劇的な展開だが、よく見るとこの2人はともに美男美女で性格も良好、更に趣味も一致していたから、以降スクリーン上はハリウッドのミュージカル映画のような楽しい展開に。なるほど、なるほど、本作はそんな映画なのか・・・。

そう思っていると、宗教の違うパキスタン人の男性との結婚などもっての他と猛反対するジャグーの父親（パリークシト・サーハニー）と、それを更に権威づけする導師が登場したため、ジャグーは明日2人だけの結婚式を強行しようと提案し、サルファラーズもそれに同意したが、さて当日教会で待つジャグーの下に1人の子供から届けられた手紙には・・・？この展開もそれなりに楽しいが、そこにはPKは一切登場しないから、アレレ・・・。

■□■神さまは行方不明？PKが探しているものは？■□■

日本の女子大生が就職を希望する一番人気はここ数年「局アナ」だが、それはインドでも同じらしい。父親の猛反対とサルファラーズの裏切り（？）によってサルファラーズとの恋に破れたジャグーは今、母国インドに戻り、某局のテレビレポーターとして元気に働いていた。何ゴトにも前向きで積極的に自分のネタを売り込もうとしていたジャグーはある日、地下鉄で黄色いヘルメットを被り、大きなラジカセを持ち、あらゆる宗教の飾りをつけてチラシを配る奇妙な男・PKを発見！そのチラシには「神さまが行方不明」の文字が！

この男はいったい何者？なぜ神さまを捜しているの？そう考え、これはネタになると直感したジャグーは単独インタビューを試みたが、PKの話しはまるでチンプンカンプン。それでも強引かつ気長に取材を進めていくと、「僕は宇宙から来た」「宇宙に帰るリモコン

を奪われた」「なぜ神さまはいないの?」「僕は人の気持ちちがすべて読める」等々、その言葉は不思議なものばかりだった。この男は精神異常者? そうも考えたが、ある日の「ある実験」によって「人の気持ちちがすべて読める」というPKの言葉がウソではないことがわかると・・・。

他方、PKが奪われたリモコン(玉)を己の宗教のシンボルに祭り上げていたのが導師。その集会に闖入したPKは「このリモコンは僕のものだ。返してくれ」と迫ったが、そんな要求が通るはずはない。しかし、本作中盤では導師(の宗教インチキ性)をめぐるPKと導師との「論争」が強まっていったため、ジャグーは上層部の承認を取り付けてその単独取材をすることに。その視聴率がどんどん上がっていく中、PKも人気者になっていたが、ホントに神さまは行方不明? また、導師の宗教はホントにインチキ・・・?

来年1月に公開される『沈黙 - サイレンス - 』(16年)は遠藤周作の原作『沈黙』を映画化した「ホントに神サマはいるの?」と問いかける深刻な問題提起作。それと同じように本作中盤のテーマは「神さまは行方不明?」だが『沈黙 - サイレンス - 』ほど深刻ではないので、大いに楽しみながらその論点を整理し勉強したい。

■宗教のインチキ性の立証は?■

さまざまな教義を掲げる新興宗教は常に存在しているが、日本ではかつて「オウム真理教」のインチキ性が大問題になった。そのリーダーである導師・麻原彰晃は「空中浮揚」を売りしていたが、今やそのインチキ性は明白になっている。ところが、本作に登場する導師はどう見てもインチキっぽいにもかかわらず、多くの熱狂的な支持者がいるから彼に単独で論争を挑むPKは分が悪そうだ。しかし、純真無垢なPKはホントに人の気持ちちがすべて読めると信じ始めたジャグーは、上層部を説き伏せてこの新興宗教のインチキ性をテーマとした「導師 vs PK論争」を公開討論とし、それをテレビで単独中継したからすごい。そこでは、インド人女性のジャグーが宗教の異なるパキスタン人男性サルファラーズと恋に落ちたが、サルファラーズの裏切りによって結婚がダメになったというテーマが取り上げられた。宗教の異なる2人が別れるのは当然。そう主張する導師に対して、人の気持ちちがすべて読めるPKがその時の状況を分析した(?)ところ、真実はそうではなかったらしいことが判明!

ジャグーの父親は敬愛する導師に相談のうえ、娘がパキスタン人のサルファラーズと結婚することを断固拒否したが、それだけでジャグーが引き下がるはずはない。ジャグーはなぜサルファラーズから結婚を断られたと誤解してしまったの・・・? 日本でも男女の恋をテーマにした(公開の)人気テレビ番組は多いが、本作に見るこの公開実況中継番組の人気は高いから、そこでPKの「信じる力」によって「ある真実」が明らかにされると・・・。

宗教のインチキ性を証明するのは本来難しいが、ここまで完膚なきまでにPKが真実を明らかにすれば導師の敗北は明らかだが・・・。

■□■インド映画の底力を確認！■□■

本作導入部は①PKの地球上への降臨とリモコンの強奪、それに続く、②留学先におけるジャグーとサルファラーズとの恋模様の展開、そして③PKが「神さまは行方不明？」と懸命に神さま捜しに動く姿、という3つのストーリーが展開していく。この3つのストーリーは全く関連性がないから一瞬「これは一体何の映画？」とってしまうが、テレビ局のレポーターになったジャグーがPKの取材に動き始め、導師とPKとの間の新興宗教のインチキ性をめぐる「論争」になってくると、俄然本作のメインテーマが明確になってくる。また、PKと導師との宗教のインチキ性をめぐる論争は興味深い。

本作も多くのインド映画と同じように153分と長尺だから、この中盤の展開を見ていると導入部のストーリーを忘れてしまうのも無理はないが、最後にはミステリー調の展開の中で(?)この導入部の物語が見事に収束していくことになるので、それに注目!思わず感動で涙、涙・・・というほどではないし、若干つめ込み過剰気味だが、メインテーマをきっちり設定した上での歌って踊るインド映画の底力を本作でもしっかり確認することに・・・。

2016(平成28)年12月28日記